

# 飛鳥京跡苑池遺構第2次調査 現地説明会資料(2001年3月25日)

## 1. はじめに

飛鳥京跡苑池遺構は、平成10年度及び11年度の第1次調査によって初めて確認されたもので、飛鳥京跡に付随する苑池です。第1次調査では苑池の南端付近を調査して、石積み護岸と池底の敷石を検出しました。また池の中では石造物2点と島状の石積み、南へ舌状に張り出す石積み護岸を確認しました。この石積み護岸の様子から、苑池は調査区外の北方に広がることが確実となりましたので、今年度は苑池の範囲と形態の確認を目的として、北方の水田中において調査を行っています。調査は平成12年11月27日より開始しました。現在までに、南北150m、東西100mの範囲の中で9箇所調査区を設定し、合計約900㎡発掘しています。調査区は幅5mのトレンチを基本とし、遺構の検出状況によって随時拡張しています。

調査に際しまして、土地所有者の岡寄正博様、岡崎義男様、杉本圭史様、辰巳勝久様、古川泰司様から多大なご協力をいただきました。また地元の明日香村教育委員会、岡区からも多大なご協力、ご援助をいただきました。記して感謝申し上げます。



「国土地理院発行 1/25,000( 畝傍山 ) を使用」

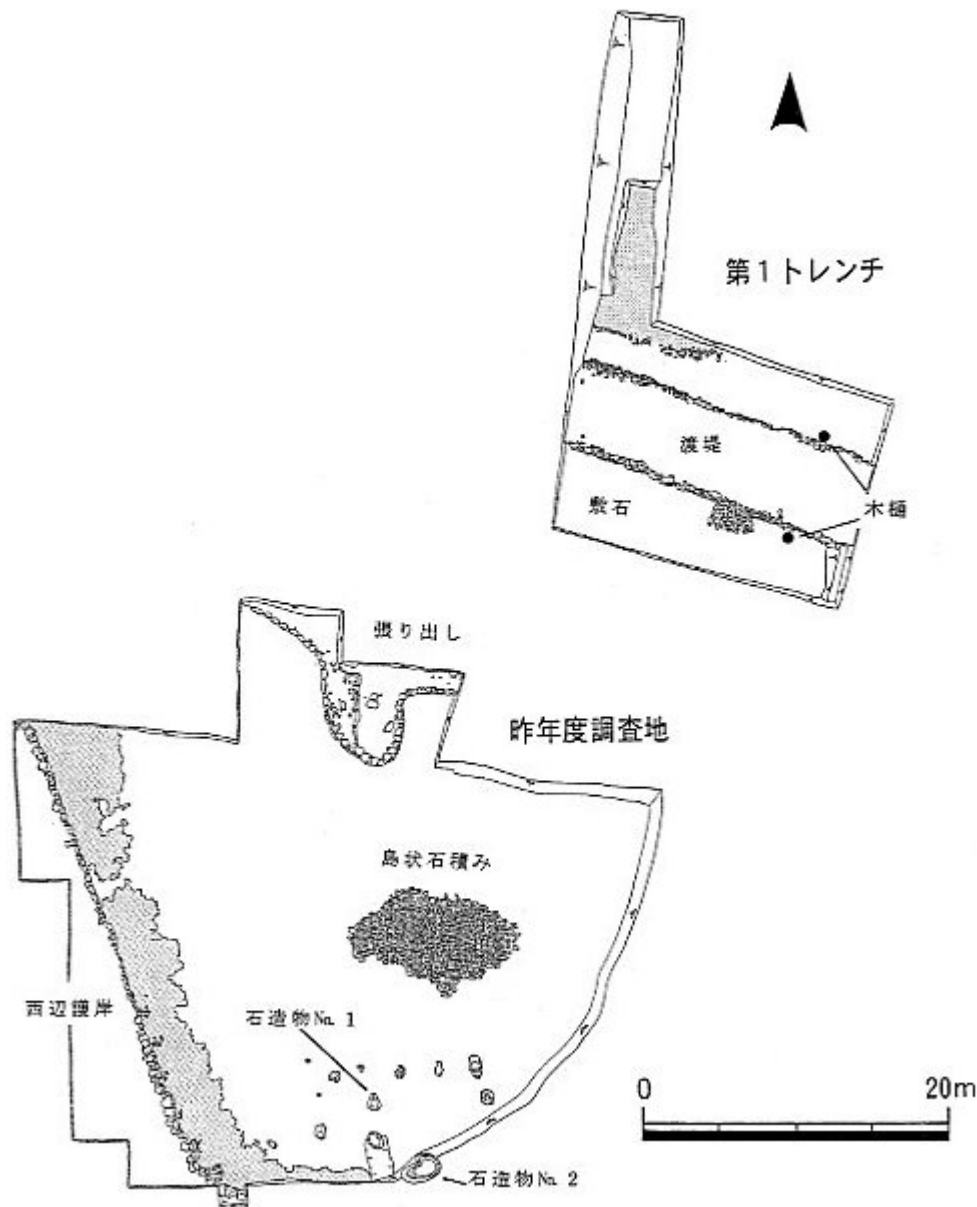
## 2. 調査の概要

**渡 堤** 第1トレンチで池中に築かれた東西方向の渡堤を確認しました。池の東岸から池中の中島に渡るためのものと考えられます。規模は幅5mで、長さ20m分検出しました。調査区内では同じ幅で直線的に続き、東西両端とも調査区外に延びています。渡堤の南北面は石積み

護岸を施しているのですが、池の形状はこの渡堤を境として南北で大きく異なっています。南面護岸は高さ1.6mで、やや大振りな石を用い、面を揃えて4、5段積みしています。池底は平らで20cm前後の石を敷き詰めています。南面の護岸際には、1.5×3mの方形に、敷石が上下二層になっている箇所があります。池底の高さは標高107.4mで、昨年度検出した南側の池底と同じです。

一方、北面護岸は小振りな石を多用し、やや無造作に4、5段積み上げています。後世に土圧がかかり、壁面が膨らんだり、石が抜け落ちている部分があります。護岸の高さは1.7mですが、苑池の最終段階で護岸際に厚さ50cmほど整地しています。そして2m幅で犬走り状の平坦面を形成しており、端には縁石を立て並べています。池底は平坦ではなく、北に向かって下がっています。調査区内では、最深部に達していないのですが、護岸底とは2mの比高差があります。

渡堤に付属する施設として木樋を確認しました。調査区東端より4.5mの位置にあり、渡堤と直交方向に突き抜けて水を流しています。木樋は丸太を半分に割って中を刳抜き、上下に組み合わせたもので、径は20cmあります。木樋を置いた面は護岸の底と同じで、北に向かって若干下がる勾配をつけています。なお、レーダー探査をしたところ、渡堤は西方には調査区外より約15m続いているという結果がでました。



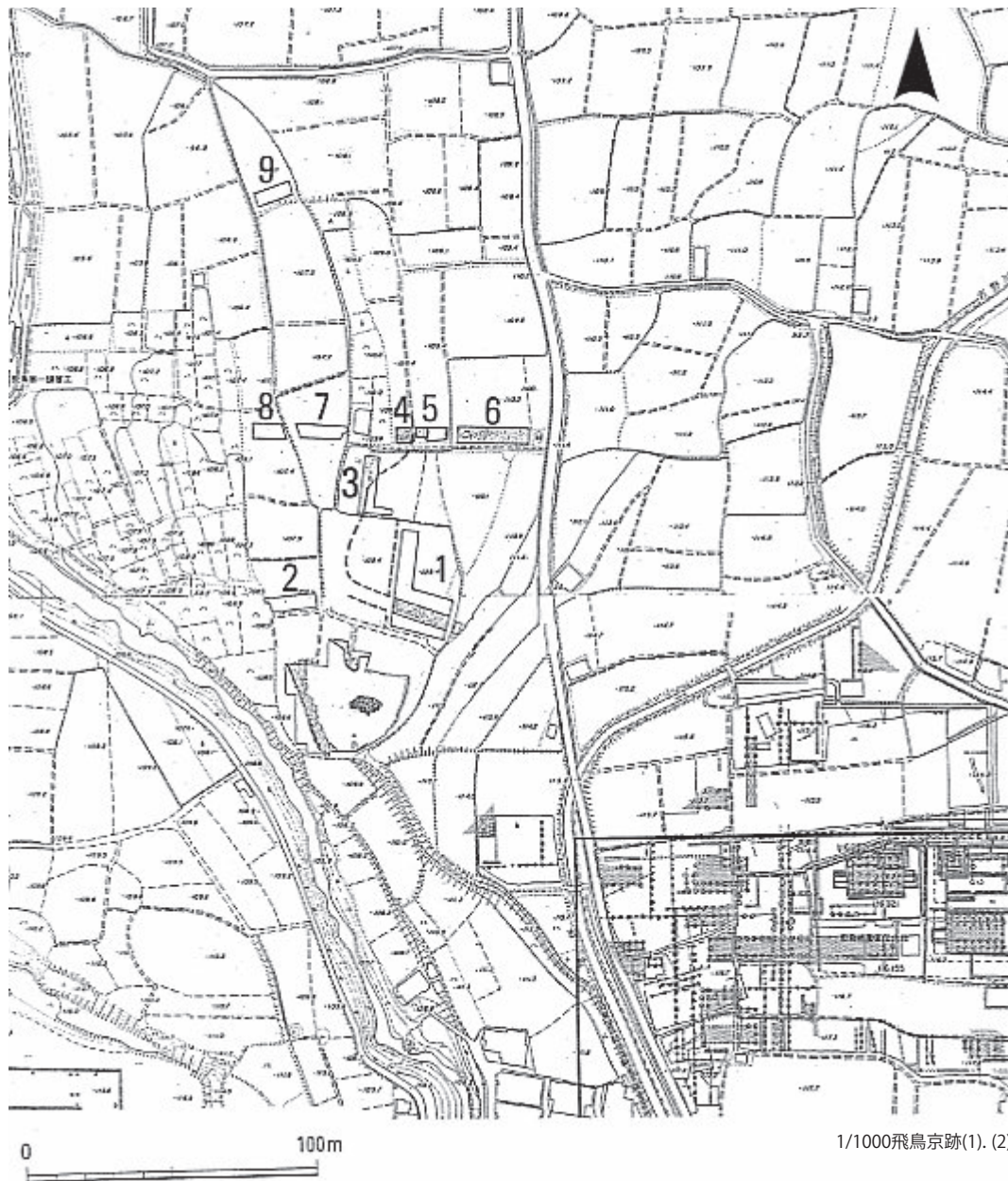
**中島** 第3トレンチで中島の東護岸を確認しました。護岸はトレンチを南北に縦断しており、長さ11m分を検出しました。護岸の北半は緩やかに彎曲して、東に向きを変えています。護岸の高さは1mです。池底には石が敷き詰められ、東に向かって緩やかに傾斜しています。中島の上面では遺構は検出されませんでした。

**通水部** 第5トレンチで池の水が北に向かって抜ける東西幅6mの通水部を確認しました。通水部の両側は高さ0.9mの石積み護岸を施していますが、底面は素掘りのままで中央をさらに幅3.5m、深さ0.5mで溝状に掘り窪めています。この底の高さは第1トレンチの最深部で確認した池底よりも0.75m高くなっています。底面から護岸の上端まで厚さ1mの粘土が堆積していますが、これは飛鳥時代に形成されたものです。この土層より木簡が約40点出土しました。その中に年号が書かれたものがあり、「丙寅年」(天智5年＝西暦666年)と記されています。これらの木簡の書かれた内容、埋没した時期、どこから流入したかについては現在検討中です。

**掘立柱列** 第6トレンチで東西方向の掘立柱列を確認しました、8間分9基を検出し、柱間の寸法は2.1～2.2mです。柱穴は径1.3～1.8mの不整楕円形で、柱通りは東で北に約4度振れています。建物になるか塀になるかは判断できませんが、時期は苑池と同じものです。



苑池西側 中島の西側にあたる推定苑池内において4箇所のトレンチを設定、発掘しましたが、いずれも飛鳥川の洪水を示す砂礫層が一面に堆積していました。洪水は大規模で、中世まで数時期に及んでいるため、苑池や中島の範囲を示す資料は得られませんでした。



1/1000飛鳥京跡(1). (2)

### 3. ま と め

今回の調査成果として次の2点があげられます。

1. 苑池の範囲がさらに北に拡大することが判明しました。北岸は確認されていないので正確な規模は不明のままです。しかしながら、現在畑として耕作されている高まりの部分が、苑池の中島を踏襲している可能性が高く、その範囲からすれば、苑池自体は南北長が100mを優に越える大規模なものとなります。

2. 苑池の東側が渡堤によって南北二つの池に仕切られ、池底の形状が全く違うこと、中島が南北に細長い形態をもつ可能性があることなど、苑池の内部が複雑な構造になっていることが判明しました。